



掟破り

2月2日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

2月2日のおはなし「掟破り」

子ども時代の遊びで「ドロジュン」というのがあった。泥棒と巡査に別れてやる鬼ごっこだ。地方によっては泥棒と刑事のおいかけっこということで「ドロケイ」とか「ケイドロ」とか呼ばれているらしいが、おれたちの地方ではドロジュンだった。泥棒と巡査の分け方はシンプルで、みんなが丸くなって中央に握りこぶしを突き出す。その場の仕切り役が自分から（あるいは好きな所から）数え始める。

「いち、に、さん、し、強盗。ろく、しち、はち、く一、巡査」といった調子で5番目は強盗、10番目は巡査になっていくわけだ。だったら「ゴウジュン」とか「ジュンゴウ」とかいう名前にしたってよさそうなものだが、とにかくおれたちの所ではドロジュンだった。逃げ回る泥棒を巡査たちが追い回し、タッチすれば逮捕。つかまった泥棒は牢屋に入れられるのだが、自由な身の泥棒が牢屋につかまっている仲間にタッチすれば彼らも自由になって逃げ出してしまう。この辺は「缶蹴り」のバリエーションのようなルールだ。

おれたちの遊び方はさらに改良を加えたものだった。まず宝物。おれたちはみんな家からメンコやビー玉など宝物を持ってこなくてはならない。そして巡査に決まった者は泥棒側に持って来た一品渡さなくてはならないのだ。それを盗品とみなすわけだ。しかも、遊びの終わりまで逃げ延びられた泥棒は、その宝物を本当にもらうことができる。巡査は自分の宝物を奪い返すことが目的となり、俄然、真剣味が違ってくる。

次に牢屋。下水溝の上に鉄格子の枠がはめられていたのだが、その上が牢屋だった。鉄格子も牢屋っぽかったが、それだけではない。そこは考えられないくらいひどい場所だった。下水溝は淀んでいて、糞尿なのか生活排水なのか、とにかくとんでもない匂いを放っていたのだ。上に立っているだけで頭ががんがん痛くなり、吐き気を催すほどだった。

さらにこの鉄格子がせいぜい1メートル四方くらいしかなかったので、5人も乗ればいっぱいになってしまったのだ。そこで持ち込まれたのが「仮釈放」というルールだ。牢屋に捕まっている泥棒の中で、他の泥棒の隠れ場所を教えたり、解放に来た仲間を巡査側に教えたりして一番協力的だった囚人を「仮釈放」と称して外に出し、代わりに新しい囚人を収容するのである。

こうなると遊びの焦点は、誰を牢屋に長く閉じ込めるかという罰ゲーム的な要素が強くなる。そしてその罰と来たら、気絶しそうな悪臭という本物のヘヴィな苦痛をとまなう牢屋なのだ。仮釈放中の泥棒は宝物こそ持っていないが、自由な泥棒からこっそり宝物をあずかることができる。預けた泥棒は万一捕まっても、宝物を持っていないと言うことで現行犯逮捕ができなくなる。逆に誰かの宝物を預かっていることが判明すると、仮釈放の元泥棒は牢屋に戻り、鉄格子の上に正座しなくてはならないという強烈な罰を与えられる。

おれたちはまさしく命がけで逃げ、追いかけて、つかまえ、駆け引きをした。牢屋に引きずられていく時は本当に恐怖を覚え、正座させられることになって泣き出す子もいた。その全てのルールを持ち込んだのが堂前のおっちゃんだった。おまけにおっちゃんは自分でつくったルールを平気で破ってこう言っていた。「あほか、ルールなんて破るためにあるようなもんや。守らんやつがおるからルールを作るんや。みんな守るんやったらルールなんていらへん」

* * *

その教えは強烈で、おそらく当時一緒に遊んでいた悪ガキの仲間たちはみんなその考えに染まっていただろうし、おれのようにいまでもそう考えている者もいるはずだ。堂前のおっちゃんはおれたちのヒーローだったし、精神的指導者だったと言ってもいい。それなのに、いまおれはおっちゃんに消されそうになっている。おっちゃんが口を開いた。

「おれはなほんまは海外に出たらあかんねん」

「なんで」
「保護観察中なんや」
「おれ言わへんて、誰にも」
「それだけやない。組の連中にも追われとんねん。お宝持ち逃げしてもうたからな。見つかったら命あらへん」
「だから絶対言わへんて！」
「お前らには言わんかったけど」おっちゃんが話題をそらしたのがわかった。「おれ、ほんまはな、ほんまは中国人なんや」
「あ、そうなん」またおれは間抜けな返事をしてしまった。だってほかにどう答えようがある？「知らんかったわ」
「小人やいうだけで差別を受け、中国人やいうことで差別を受けた」
重い話におれは言葉を失った。
「おれの秘密を知られた以上、もう生かしくわけにはいかん」
「待ってえな！ おっちゃんが勝手に話したんやないか！」
「組織の掟や。タダシ、諦めてくれ」
「おれ、そんな知らんかったのに」
「これがおれの本名や」

おっちゃんが名刺をすっとさしだした。
そこには肩書きも何もナシで、大きく三文字「迦釈法」と書いてあった。
モジリヤんか。
仮釈放のモジリヤんか！ 釈迦をひっくり返して、説法の法がついているだけや。おれはこの男に殺されるんかと情けない気分になって言った。
「仮釈放ヤんか」
「わかるか」
「わかるわおっちゃん」
「ほな、名前の話はなかったことにしといてや」
なんやねんそれ！ なんでここでしょうもない嘘ついとんねん。
「なあ、もうほんま堪忍してえな」
おれが頼むと堂前のおっちゃんはふうっと大きく肩で息をした。
「せやな」そう言いながら、おっちゃんはおれの目を見てにやりと笑った。「掟は破るためにあるんやしな」

(仮釈放) ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

【リンク作品】

「[呼び込み係\[SFP0214\]](#)」

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

掟破り

<http://p.booklog.jp/book/43218>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43218>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43218>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.